

[研究ノート]

F. プーランクの合唱曲『フランスの唄』に関する予備的考察

～原曲との比較を通して～

田崎 直美

1. 研究目的

本稿は、フランシス・プーランク(POULENC, Francis 1899-1963)の音楽作品におけるシャンソン・ポピュレール(フランス民謡)¹⁾受容研究の一環である。プーランクの作品が評価される時、しばしばシャンソン・ポピュレールとの近似性がいわれてきた²⁾。また彼は生涯で2つの時期(1922~26年と1945~46年)にシャンソン・ポピュレールを素材とした作品を書いている。しかしシャンソン・ポピュレールに対するプーランクの態度については資料が乏しい上、具体的な作品研究を通じた考察もこれまでなされていない。そこで本稿では1945~46年の作品である合唱曲『フランスの唄 Chansons françaises pour chœur a cappella』(以下《CF》と略記)を研究対象曲として(表1)、筆者による調査の結果判明した原曲(表2)との比較を通して、プーランクがどのようにシャンソン・ポピュレールを受け入れ、取り扱ったか、考察を試みる。

《CF》は、シャンソン・ポピュレールに和声付けした作品であることは知られているが、それらの直接の出典は不明である³⁾。しかし、プーランクが民謡を直接採集していた痕跡がないこと、19世紀後半から多くのシャンソン・ポピュレール集が楽譜とともに出版されていたことから、原曲には楽譜として書かれた民謡が用いられた可能性が高いと考える。そこでまず筆者は、本稿における原曲の定義を「《CF》の主題に最も類似した旋律と歌詞を併せ持つシャンソン・ポピュレールで、最も早い時期に楽譜として記されたもの⁴⁾」として、調査を行っている。

表1 《CF》各曲のデータ

番号 ^{*1}	曲名	編成 ^{*2}	作曲年月
《CF1》	Margoton va t'a l'iau avecque son crochon 「水汲みに行ったマルゴトン」	S,M,T,Br	1945, 8
《CF2》	La Belle se sied au pied de la tour 「麗人は塔のふもとに座り」	S,M,T,Br,B	1945,9
《CF3》	Pilons l'orge 「大麦を挽こう」	S,M,A,T,Br	1945,8
《CF4》	Clic,clac,dancez sabots 「踊れ木靴」	T,Br,B	1945,9
《CF5》	C'est la petit'fill'du prince 「大公の娘」	S,M,T,Br,B	1946,4
《CF6》	La Belle si nous étions…「きれいな人、もし僕らが」	T,Br,B	1946,4
《CF7》	Ah! Mon beau laboureur 「ああ、農夫さん」	S,M,T,B	1945,8
《CF8》	Les Tisserands sont pir'que les évêques 「職工たちは司教よりも大変だ」	S,M,T,Br,B	1946,4

*1: 本稿では、この表の番号を用いて、個々の作品を指し示す。

*2: S:ソプラノ、M:メゾソプラノ、T:テノール、Br:バリトン、B:バス を示す。

表2 (現在判明した) 《CF》の原曲

番号	原曲(編者、曲集名)	出版年	備考
《CF1》	BALLARD,Christophe. <i>Brunettes ou petits airs tendres</i> , vol.3,p.296,(Paris).	1711	“Chanson à danser en rond”
*1 《CF2》	<i>Recueil de 102 chansons</i> (manuscrit Bibliothèque nationale, fr.5594, no 89).	不明	15世紀末成立の唄
*2 《CF3》	ATTAINGNANT,Pierre./HUBERT,Iuliet. <i>Second livre contenant x x vii chansons nouvelles à quatre parties</i> (Paris:musique du Roy).	1540	4声体に編曲されている
《CF6》	WECKERLIN,Jean-Baptiste. <i>Echos du temps passé</i> , 3 vol.in-8.	1856-57	
《CF7》	BALLARD,Christophe. <i>Brunettes ou petits airs tendres</i> , vol.1,p.265-267,(Paris).	1703	“Chanson à danser en rond”
《CF8》	<i>Poésies populaires de la France</i> (manuscrit Bibliothèque nationale t. III, p.471).	1814 (写譜年)	

*1: この曲に関してのみ、原曲と《CF2》の歌詞は一致したが、音楽旋律が一致しなかった。

*2: さらに古い単旋律の原曲が出版されている可能性有り。

2. 原曲の性質

ここでは原曲の性格をジャンル別に分類する。なおジャンルは、

TIERSOT 1889の分析を参照した。

① 踊り唄 *Chanson à danser* : 《CF 1》《CF 4》《CF 5》《CF 6》《CF 7》

《CF 1》《CF 7》の原曲は『ブリュネット集 *Brunettes*⁵⁾』の中で“*Chanson à danser en rond* (円状の踊りのための唄)”として収録されている。歌詞は全体が小話としての筋を持っており、その筋はリフレインを毎回挟みながら有節形式で進行していく。なお《CF 4》《CF 5》の原曲は不明だが、形式がこの2曲に類似する。《CF 6》の原曲は Caen 地方で口頭伝承されている唄が採譜されたもので、歌詞の内容は他愛のない恋歌である。リフレインが18世紀のタンブル *timbre* に類似しているという指摘がある⁶⁾。踊り唄の特徴としては、リズム機能と旋律が歌詞より優先されること、リフレインが重要な役割をになっていることが挙げられる⁷⁾。ここでは歌詞最後のリフレイン部分で“Aïe (原曲では *Ahïe*)”(《CF 1》)、“Clic, clac”(《CF 4》)、“ô lire, ô la”(《CF 7》)といったオノマトペが多用されて、曲にリズム感が与えられている。

② 仕事唄 *Chanson de métier* : 《CF 3》《CF 8》

《CF 3》は粉挽き唄、《CF 8》は機織り唄である。どちらの原曲も、リフレイン部分の歌詞と旋律が、活発な仕事のリズムを巧みに表現している。

③ コンプラント (嘆きの歌) *La complainte* : 《CF 2》

《CF 2》の原曲は、16世紀初頭に大流行し、Josquin de Pres, Bussy, Roland de Lassus, Claude Lejeune らによって多声体としてシャンソン集に収められていることが分かっている。また“ペルネット *Pernette*”と呼ばれる形式で、フランス中部や東部の地方で歌われているという記述がある⁸⁾。

3. 《CF》の主題旋律と原曲の比較

《CF》の主題旋律と類似する原曲にも、より詳細に見てみると以下の点で特徴的相違が見られた⁹⁾。

① 声域 (又は調性)の違い : 《CF 1》《CF 7》《CF 8》

原曲よりも《CF》の方が、声域が低く、実際には歌いやすい音域になっている (3度低 : 《CF 1》(原曲 *g moll*→*e moll*)¹⁰⁾, 《CF 7》(原曲 *a moll*→*fis moll*) / 4度低 : 《CF 8》(原曲 *C Dur*→*G Dur*)。原曲は記譜される際、調号がなるべく多くならないように移調されていた可能性もある¹¹⁾。

② 記譜された音価の違い : 《CF 1》《CF 3》《CF 7》

これらの音価は原曲の音価の1/2で記されている。原曲は白符計量譜で、記譜された当時の速度を考慮した上での変更と思われる¹²⁾。

③ 拍子の違い : 《CF 6》《CF 7》《CF 8》

《CF 6》: 原曲 2/4 拍子 → 2/2 拍子(原曲の2小節分が1小節)、リフレインの最後の小節は、3/2 拍子として処理。

《CF 7》: 原曲 2/2 拍子、アウフタクトで開始 → 4/4 拍子と 3/4 拍子(リフレイン部分)、アウフタクトなし。(原曲とアクセントの位置が異なる)。

《CF 8》: リフレイン部分で“*En roulant*”の歌詞に相当する個所が、原曲:一拍アウフタクト → 拍頭から開始(アクセントの位置が異なる)、リフレイン最後の小節のみ 5/4 拍子に変化。

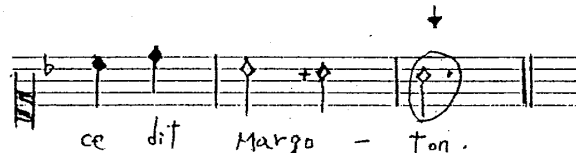
④ 旋律、リズム形の違い : 《CF 1》《CF 6》《CF 8》

《CF 1》: (17小節目の終止音) 原曲: 2度音(*g moll* の A) → 主音(*e moll* の E)¹³⁾ (【譜例1 a, b】)。

【譜例 1 a】 原曲 mm. 15-17



【譜例 1 b】 《CF 1》 mm. 15-17

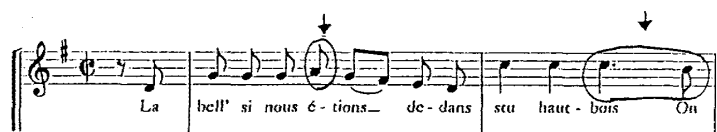


《CF 6》：(1小節目第4音) 原曲: G → A。また《CF 6》2小節3,4拍目に相当する部分のリズムが若干異なる(【譜例2 a, b】)。(《CF 6》7小節3拍目に相当する部分の音符) 原曲:フェルマータ有り → フェルマータなし。

【譜例 2 a】原曲 mm. 1 - 4

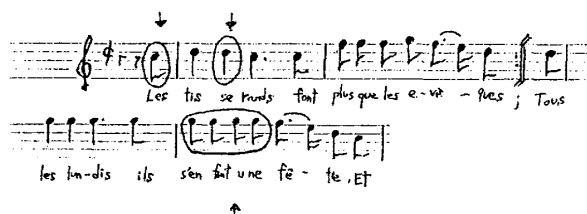


【譜例 2 b】《CF 6》 mm. 1 - 2

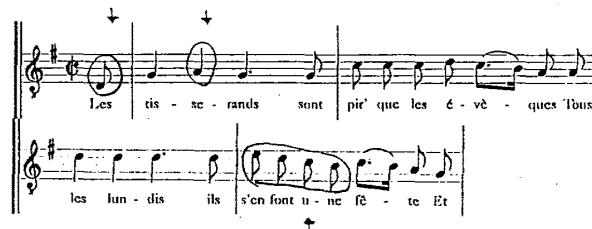


《CF 8》：1小節目“Les Tisserands”の歌詞に相当する部分の旋律の動き、4小節目1,2拍目の旋律の動きが異なる(【譜例3 a, b】)。また、《CF 8》8小節4拍目に相当する音が異なる(【譜例4 a, b】)。

【譜例 3 a】原曲 mm. 1 - 4



【譜例 3 b】《CF 8》 mm. 1 - 4



【譜例 4 a】原曲 mm. 9-10



【譜例 4 b】《CF 8》 mm. 8 - 9



⑤ 歌詞の違い：《CF 1》《CF 6》《CF 8》

《CF 1》：原曲: 詩節が進行する時、前詩節最後の2行をもう一度最初に反復→ 全詩節で1詩節目の最初の2行“Margoton va t'a l'iau / Avecque son cruchon (マルゴトンは水差しをもって水汲みに行った)”を反復。

《CF 6》：原曲：詩節最初の 1 行目と 2 行目をそれぞれ一回ずつ反復しながら進行→ 反復なし。

《CF 8》：(リフレイン部分の 1 行目) 原曲：“Et tipe tape et frippe frappe”
→ “Et tipe et tape” の反復。(リフレイン部分 3 行目の後)原曲：“roun lan la”
がある→ なし(このため、《CF》の方が原曲よりも 1 小節短くなっている)。

4. 《CF》の音楽書法における特徴

《CF》の音楽書法は、視点別に幾つかの共通点とパターンを見出すことができた (表 3)。

ここで分かることは、上記の視点から《CF》の各曲すべてを分類した場合、主として 2~3 パターンに分類されること、そして各分類項に属する曲は視点ごとに組み合わせが変わっていることである。すなわち、プーランクは書法としては極めて限られた方法を用いながらも、全 8 曲を性格別に分類して書法を決めていたのではなく、各曲がそれぞれ少しずつ異なる性格のものとして作曲した、と考えられる。もっとも、作曲年月が同じである《CF 1》と《CF 3》、《CF 5》と《CF 6》は比較的共通項が多いことも、指摘ができる。

表 3 《CF》における視点別共通特徴

視点	特徴	見出された曲
構成	主題旋律は基本的に 1 声部のみ	全曲
	クプレ部分で主題旋律外の声部は、 同音(同音型)反復、又はその変奏型の反復中心	2 曲目を除く全曲
	リフレイン部分が、①ほぼすべて定型 ②一部定型	① 1, 3, 5, 6 曲目 ② 4, 7, 8 曲目
	(導入部)-A-B-A-B 形式	(1), 7, 8 曲目

和声	主題旋律は機能และ声的、全体を通して機能และ声書法	全曲
	特定の音程(空虛5度、長7、長9度)による響きの多用	3, 6, 8 曲目
	三和音の平行進行の使用	1, 2, 5, 6 曲目
	リフレイン部分で ①機能และ声による終止 ②旋法的終止	① 6, 7, 8 曲目 ② 1, 2, 5 曲目
リズム	全体を通して拍を強調するリズム、シンコペーションなし	全曲
	主題旋律声部と他声部のリズム型が、①全体を通して対照的 ②クプレの部分で対照的 (リフレイン部分では同じ) ③全体を通して同じ	① 2, 4, 7 曲目 ② 5, 6, 8 曲目 ③ 1, 3 曲目
歌詞	すべてシラビック	全曲
	①クプレ部分では基本的に主題旋律声部のみが歌詞を受け持つが リフレイン部分では全声部が歌詞を受け持つ (他声部は “la, la…” “Ah!” などやハミングが多い)	① 5, 7, 8 曲目
	②全体を通して主題旋律とその対旋律のみが歌詞を受け持つ (他声部は “la, la…” “Ah!” などやハミングが多い)	② 2, 4, 6 曲目
	③全体を通して全声部が歌詞を受け持つ	③ 1, 3 曲目

5. 結語

今回の原曲調査で旋律、歌詞ともに非常に類似した曲が判明したことにより、プーランクが《CF》において、シャンソン・ポピュレールをかなり忠実に再現して作曲したことが、大部分において証明された。そして今回分かったことは、次の2点である。

一つは、原曲が多様なシャンソン・ポピュレールであることである。ジャンルは踊り唄が最も多いが、仕事唄のように非常に軽快で陽気な性格のものや、コンプラントのように真面目で感動的なものもある。原曲の年代については、おそらく16~18世紀に流行していた曲が、遅くとも19世紀後半までには記譜されたと推測することができる。もっとも原曲の地方性に関しては、地方独自の唄という概念が18世紀後半までは特になかったようで¹⁴⁾、今後も不明の部分が多いと思われる。

もう一つは、合唱曲としての書法が非常に単純で、限られた手法を用いて各曲をバランスよく書いていることである。プーランクは取り扱った原曲を、「個々のシャンソン・ポピュレール」というよりもむしろ「《CF》

全体で一つのシャンソン・ポピュレール」ととらえていた可能性もある。

《CF》は、プーランクがシャンソン・ポピュレールに「和声付け」をした、最初で最後の曲集であった。この曲集は、当時プーランクが収入を得るための手段にすぎかった、という考え方も可能ではある¹⁵⁾。しかし、当時になぜ《CF》を作曲したのか、なぜこれらのシャンソン・ポピュレールが選択されたのか、今後は原曲調査とともに社会的文脈と併せて考察する必要があると考える。

注

- 1) シャンソン・ポピュレールという用語は1920年以降ミュージックホールなどの大衆音楽も指すようになったが、本稿で取り扱うものは古くから口頭伝承で受け継がれてきているとされるフランス民謡である。
- 2) モーリス・ラヴェルの発言「プーランクは彼独自の民謡を創り出す」(POULENC 1954)は、HELL 1978 や HURARD-VITARD 1989などで引用されてきている。
- 3) プーランクがベルナック(BERNAC, Pierre 1899-1979)に宛てた未刊の手紙(SCHMIDT 1995, p. 369)の内容から推測すると、ベルナックがプーランクに教えたシャンソン・ポピュレールの専門書から、プーランクは原曲を抜粋した可能性がある。
- 4) シャンソン・ポピュレールはたいていの場合、一つの主題について旋律、歌詞ともに多くの変奏が存在している(MARCEL-DUBOIS 1980)。しかし本稿では、プーランクは書き記された1つの譜面を基に作曲したという仮定から、この変奏の問題は取り上げない。
- 5) 17世紀後半から18世紀にかけてフランスで流行した、素朴な恋歌。
- 6) COIRAULT 1955 (t. II), p. 295.
- 7) TIERSOT 1889, p. 125.

8) TIERSOT 1889, p. 19.

9) この相違は、プーランクが直接参照した楽譜において既に表れていた可能性もあり、プーランクが編曲を行った際に表れたものとは断定できない。

10) 《CF 1》の原曲は既に、19世紀半ばに出版されたシャンソン集で e moll へ移調された形で掲載されていた (COIRAULT 1955, p. 352-353)。

11) シャンソン・ポピュレール集 *Anthologie Française* 1765 の序文には、楽譜の編集に際してそうした配慮をした旨が記載されている(p. 6-7)。

12) Shaeffner も16世紀の曲を編曲する際に、見かけの遅さに惑わされないようにと同じ処理を行っている (SORG/GUEGAN 1924, p. 271) 。

13) 19世紀半ばに出版されたシャンソン集で既に、この曲の終止音が主音になっていたことから(COIRAULT 1955 (t. II) p. 352-353)、プーランクはそちらの楽譜を用いた可能性もある。ちなみに TIERSOT はこの曲を、2度音上で終止するシャンソン・ポピュレールの例として取り上げている (TIERSOT 1889, p. 315)。

14) MARCEL-DUBOIS 1980.

15) この作品は書簡から(POULENC 1994, p. 646)、レコード会社のディレクターである Henri Screpel による委嘱作品であった可能性が推測される。またベルナックに宛てた手紙(SCHMIDT 1995, p. 369)でプーランクは、この作品の(契約金)5万フランで《ティレジアスの乳房》(1947年初演)の収益の埋め合わせができるという。

引用文献

Anthologie Française, ou Chansons choisies, depuis le 13e Siècle jusqu'à présent,

1765 (出版地未記載: Tantus amor Florum. Georg. IV).

COIRAULT, Patrice. 1953-59 *Formation de nos chansons folkloriques*, vol. I, II, III (Paris : Scarabée).

HELL, Henri. 1978 *Francis Poulenc : Musicien Français* (Paris : Fayard),

- [邦訳 『フランシス・プーランク』 村田健司 訳 (東京: 春秋社, 1993)].
- HURARD-VITARD, Eveline. 1989 *Le Groupe des six ~ ou le matin d'un jour de fête* (Paris : Klincksieck).
- MARCEL-DUBOIS, Claudie. 1980 「フランス, II 民俗音楽」 徳丸吉彦 訳 『ニューグローヴ世界音楽大事典』 柴田南雄 ; 遠山一行総監修 第15巻 pp. 277-282. (東京: 講談社, 1994) ["France, II Folk music" *The new Grove dictionary of music and musicians* (ed. SADIE, Stanley), vol. 6 pp. 756-763. (London : Macmillan)].
- POULENC, Francis 1954 *Entretiens avec Claude Rostand* (Paris ; Julliar).
- POULENC, Francis. /ed. CHIMENES, Myriam 1994 *Correspondance 1915-1963* (Paris : Fayard).
- SCHMIDT, Carl B. 1995 *The music of Francis Poulenc (1899-1963)* (New York ; Oxford : Clarendon Press).
- SORG, Roger. /GUEGAN, Bertrand. 1924 *Poésies choisies de Pierre de Ronsard*, (Paris : Payot).
- TIERSOT, Julien. 1889 *Histoire de la chanson populaire en France* (Paris : Heugel /(rep.) Genève : Minkoff, 1978).
- 使用楽譜
- POULENC, Francis. 1948 *Intégrale de la musique pour chœur a cappella* vol. 1 , pp. 56-97/ vol. 3 , pp. 20-30 (Paris : Salabert, ©1994).

たざき なおみ

お茶の水女子大学大学院修士課程を経て、現在同大学院人間文化研究科（博士課程）在学中。主要論文 ; 「F. プーランク作曲《ロンサールの5つの詩》研究 - ロンサール生誕400年記念との関連より - 」(『人間文化論叢』、第1巻 (1999)、45-55頁、お茶の水女子大学人間文化研究科)。